EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友 EDO-TOMO

No.28
2005
（平成 17 年）
11 － 12

江戸東京博物館友の会会報

目次

待望の「友の会事務室」誕生 …… 1
友の会セミナー『旧制高等学校物語』…… 2
特別内覧会『美しき日本　大正昭和の旅』展 …… 3
江戸博クリップ『ヒゲ階級』…… 3
友の会活動を支える人たち／「会議・会合日誌」 …… 4
えど友サークルだより …… 5
えど友プラザ　甲州道中「ある記」第１回 …… 6
えど友プラザ　素晴らしきかな深川祭 …… 7
同　落語・講談・街めぐり …… 8
同　「美しき日本　大正昭和の旅」展をみて …… 9
まんが『源内さんの江戸博さんぽ　その 7』…… 9
江戸博界隈⑥『法恩寺と亀井鮨』 …… 10
催事案内…… 11
会員優待のお知らせ …… 12

江戸博・事務棟内に
待望の「友の会事務室」誕生

江戸東京博物館のご好意により待望の友の会専用の部屋が９月５日に誕生しました。場所は博物館の事務棟（博物館の東側・清澄通り沿い）の１階受付の右奥で、約 19 ㎡ほどの広さです。部屋の扉には、“江戸東京博物館『友の会』事務室”と表示されています。

この日、博物館側から小林企画事業課長、同課江里口係長、友の会から岩松会長ほか数名の役員が立会い、引渡しが行われました。そして、両者で今回の便宜供与や入退室手続きについての覚書が取り交わされました。

現在のところ、この部屋は月１回行っている会計の事務処理、広報部会の月例会（編集会議）、あるいは 10 人程のサークル活動・<『八丈実記』を読む会>などに利用されています。

この部屋を会員の皆さん方との交流の場にしていくにはどのような方法がよいかなど、今後時間をかけて事務室の活用方法について、役員会を中心に考えていきたいと思っています。

会員の皆さん方も何か良いアイディアがありましたら事務局までぜひお聞かせください。

【文・写真】広報部会・菅沼和男

写真左は事務室全景、右は事務室での『えど友』編集会議

会員資格継続手続きのお願い

会員資格の有効期限は、入会の日から１年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」を郵送いたしますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、１人でも多くの方の継続をお待ちしています。

■継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

第33回　江戸東京博物館友の会セミナー（2005/9/23）

「旧制高等学校物語」

講師　秦　郁彦さん
（現代史家、元日本大学教授）

戦前の学校制度と旧制高校

今日は旧制高校ということで“弊衣破帽”の格好でこようかと思いましたが、まあそれはやめました（笑）。

まず戦前の学校制度ですが、尋常小学校(6年)の上に中学校(5年)・実業学校(同)・高等女学校(同)があり、その上に大学予科・高等学校(3年)・専門学校(同)・高等師範学校(4年)があり、高等学校の上に官立大学（3年)がありました。このほか、尋常小学校からは高等小学校(2年)―師範学校・青年学校というコースがあり、中学校等からは予科―私立大学のほか陸軍士官学校・海軍兵学校というコースもありました。このようにいろいろのコースがあり、よくできたシステムでした。

この中で、中学校―高等学校―官立大学というのは超エリートコースで、生徒数は同世代の約1％でした。このエリート教育を含む戦前の学校制度が戦後ＧＨＱ（連合国軍総司令部）により6・3・3・4制に変えさせられ高等学校も廃止されたと当初から受け止め、今も信じ込んでいる人が少なくありません。しかし、近年の研究では必ずしもそうではなく、むしろ日本側が主導したと思える面もあることが判明してきました。ＧＨＱの威光をうまく利用した改革だったといえるかもしれません。

旧制高校は38校、卒業生約20万人

旧制高校生というと文学作品では「伊豆の踊り子」「金色夜叉」「青い山脈」などにそのイメージをみることができます。今や歴史上の遺物ともいえる旧制高校ですが、全国で何校あったかというとこれにも諸説があるのですが、私は一応38校説をとっています。

その内訳は官立が31校［ナンバースクール（一高～八高)、地名スクール（創立順に新潟、松本、山口、松山、水戸、山形、佐賀、弘前、松江、東京、大阪、浦和、福岡、静岡、高知、姫路、広島、台北、旅順各高校、うち東京、台北は7年制)、帝国大学予科（北海道、京城、台北各帝国大学予科)、学習院(宮内省所管)］、公立が3校(富山、浪速、府立、いずれも7年制、富山はのち官立へ）そして私立が4校（武蔵、甲南、成蹊、成城、いずれも7年制）です。これらの旧制高校の卒業生は全部合わせておよそ21万5千人ほどになります。一番若い人で昭和7年（1932）の早生まれ（3月まで）で、この人たちは入学後1年で制度が変わっています。

旧制高校の特徴

旧制高校の特徴をまとめると、①エリート教育、②一般教養に重点（専門教育ではない)、③寮生活、④蛮カラ気風ということになります。三種の神器といえば、白線帽・黒マント・ほう歯の高下駄で、このセットがファッションになっていました。また別の三種の神器で、寮歌・ストーム・落第というのもあります。当時、落第は生徒の都合が多く、珍しいことではありませんでした。コンパ、記念祭なども共通した習俗でした。

「北帰行」と寮歌

旧制高校と寮歌は切っても切れない関係にありますが、三大寮歌といえば「嗚呼(ああ)玉杯(ぎょくはい)」(一高)、「紅萌(くれないも)ゆる」(三高)、「都ぞ弥生」（北大予科）というのが定説です。もっともＯＢたちにとっては出身校の寮歌は別格のようです。

ところが、旅順高校のＯＢたちはあの有名な「北帰行」をめったに歌わないのです。戦後の日本でもっともポピュラーになった寮歌は小林旭の歌唱でひろまった「北帰行」なのにです。実はこの歌は作者の宇田博が退校させられたあとの作品で学校当局から禁歌として通達されたものらしいのです。退校処分の理由は彼が授業をサボってある洋品店の女性と映画を見に行ったというもので、帰りのバスを降りたところで“現行犯”として査問され、処分されることになったそうです。

一高寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」はいかにも質実剛健な“硬派”の代表的なものですが、歌詞をめぐってはいろいろの説や解釈があります。これに対し三高の「紅萌ゆる丘の花」は“軟派”の代表です。一高の卒業生には政治家、官僚が多いのに対して、三高からは文学作家、学者、ジャーナリストなどを輩出しているのです。

エリート教育の現代的意味

旧制高校が廃止されたあと、時々「旧制高校復活論」が出ましたが、いずれも実現していません。普通の高校とは別に少数精鋭のエリート教育を行う場所をつくるべしという発想は、民主教育という戦後の建前と相いれぬもので、もうそれを主張する世代の人たちもいなくなりつつあります。せいぜい旧制高校のいいところを教育改革に生かしていくということしかないのです。

【記録】　文：広報部会・松原良
　　写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会　特別内覧会
（2005/8/29）

企画展

「美しき日本 大正昭和の旅」展

一般公開に先立ち８月29日午後に「美しき日本―大正昭和の旅」展の特別内覧会が開催されました。今回は東京都歴史文化財団、江戸東京博物館、毎日新聞社の主催、国土交通省、ＪＲ東日本の後援、ＪＴＢの協力によります。竹内誠館長はあいさつでまず、この展示会が、観光立国に向けて国土交通省が展開している、ビジット・ジャパン・キャンペーンにも同調する、時宜に適ったものであることを強調されました。大正から昭和の初めにかけては、日本の国力が成長し、世界が日露戦争に勝利した日本に注目した時代で、日本も海外の観光客誘致を盛んに行うとともに、国内の観光施設や交通の整備も急速に進められたが、今回の展示の美しいポスター等を見ると、かつて日本は美しかった、そして今後は美しい日本を再生したい、と述べ、最後に今回の膨大な資料を集めてこの展示を実現した学芸員小山周子氏と新田太郎氏を壇上で紹介し、労をたたえられました。

次に毎日新聞社の常務取締役事業担当の中島健一郎氏からは昭和２年に東京日日新聞社と大阪毎日新聞社が鉄道省の後援を得て日本新八景を読者の葉書投票によって定めることを発表したところ、２カ月で9300万通の応募があり（当時の日本の人口は6100万人）、強い郷土愛を示した読者の熱意に応えて日本八景の他に日本二十五勝と日本百景を選定したこと、貴重な資料となっているその関係の新聞を今回展示したということなどが紹介されました。

その後、小山学芸員による「見どころ」の簡単な解説があり、全員展示場に入りました。

見どころについては前号（『えど友』第27号）に小山学芸員の談話がありますが、その他に日本八景の選定の経緯、名勝の写真等も興味深く、あるいはなつかしく見た方もおられたと思います。川瀬巴水その他の版画ポスターは美しく、あるものは郷愁をかきたてます。確かに昔は美しかった。しかし版画には汚いものは一切表現されていないし、匂いも出て来ません。私たちは昭和の初めに比べて、その頃には想像もつかないような発展を遂げ、幸福な生活を求め、実現しながら、その中で美しいものをたくさん失って来たのも確かです。

これからは発展の中で、失ってはいけないもの、破壊してはいけないものをきちんと認識し、失わない努力をすることが必要と感じました。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

▲解説する小山学芸員

江戸博クリップ

ヒゲ階級

学芸員　田中裕二

最近では「髭（ひげ）」が小さなブームを呼んでいるのではないだろうか。電車の中や、町ですれ違う人を観察すると、髭をよく目撃するようになった。英国プレミアリーグで活躍する中田や、米国大リーグのイチロー、Ｊリーガーや人気俳優の髭の影響も少なからずあるのだろう。

統計を取った訳ではないが、博物館業界関係者には比較的、髭愛好家が多いようだ。最近、仕事上で出合った米国某大学の学長や学芸員、某アニメーション制作会社の方々、某出版会社の編集者の方など、他業種と比較すると髭の割合は多い方ではないだろうか。

ここで簡単に日本の髭が辿（たど）った歴史を振り返ると、古代日本では、髭を整えることはなかったようである。奈良・平安時代の貴族階級の肖像画に見受けられるが、実際に髭があったかは不明だそうだ。鎌倉時代以降、武士階級は髭を好み、剛勇を顕示する男性的な観念の象徴となったとされている。

明治になると、政治家・官人・軍人などの間で髭が権威の象徴として流行した。その髭は、庶民へと伝播していくのだが、その流行の様子が明治26年（1893）に発行された『東京百事流行案内』の次の一文からわかる。「士族と平民にかかわりなく髭を貯えている者ばかりで、髭がない者は薬で生やそうとするほど大流行している」。常設展示室東京ゾーン庶民の日常コーナーで展示されている、ジョルジュ・ビゴーが描いた多くの版画にも、髭を生やした明治人が描写されている。かく言う私も明治時代に思いを馳（は）せ、あご髭を触りながらこの原稿を書いていたりする。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

友の会活動を支える人たち

友の会にはいろいろな役割・実務があります。
催し物の企画・設営、会報などによる会員の皆さん方への情報提供、
そして組織の維持・運営などが主なものですが、
これらの大部分は次の人たちの協力によって支えられています。

事業部会・22名

・部会長：伴野睦雄
・書記・内覧会総括幹事：米山彰
・書記補佐：川辺愛子
・古文書総括幹事：谷岡文彦
・セミナー総括幹事：大倉和寿
・見学会総括幹事：藤村武雄
・部会員：安西洵、井上敏子、岩松精、上田太一、金本勝三郎、管林義隆、清水昌弘、清水良男、下永博道、竹橋直久、玉木達二、福田正明、藤永昭彦、松原良、山口千恵子、山本隆

★事業部会は、友の会セミナーや見学会、古文書講座など、事業の企画から運営までを担当しています。定例部会を毎月第1木曜日に開催し、部会員がそれぞれ分担を決め、各種催事の準備・運営に当っています。

広報部会・11名

・部会長：松原良
・副部会長：菅沼和男
・Web担当：岡田守弘
・部会員：稲垣武志、大野晴美、岡橋園子、岡本静雄、小柳英二郎、斉藤美香子、佐藤幸彦、高澤美恵子

★広報部会は、会報『えど友』の編集・制作、ホームページ『えど友Web版』の制作・運営を担当しています。友の会セミナー、見学会、内覧会など催事の取材や撮影、記事の執筆、誌面全体の企画・編集などが主な活動です。

総務部会・16名

・部会長：安西洵
・部会員：岩松精、岩楯護、遠藤寛、大達茂雄、小笠原淑夫、岡東和子、菊池紀子、児玉知子、後藤幸子、生井久子、野坂紘子、早崎晴美、藤井文乃、安川美恵子、吉井ゆき子

★総務部会は、友の会の運営全般、総会の運営、あるいは各種の事業・催事の受付、会報や各種パンフの封入・発送、えど友サークルの活動支援などを担当しています。

会　計・5名

・会計(役員)：管林義隆・玉木達二
・会計事務：馬越久愛、宇田川和恵、松谷賢一

★毎月第2木曜日午後の約3時間を使って次の作業を行っています。現金残高および銀行口座の確認・チェック、会費および事業収入の集計、出金伝票・領収書の照合、総勘定元帳の記載・集計、試算表の作成、予算と実績の進捗状況の把握などです。

事務局・2名

・事務局長：安西洵(総務部会長)
・アルバイト：藤井啓子
（アルバイトのみが水曜日と金曜日、午前10時から午後4時まで勤務しています。なお、不在の時は江戸博・事業企画課展示係・ボランティア事務局が代行します）

★事務局は会員の皆様からのお電話、お問合せなどの連絡業務から会員証や受講票の発行業務まで庶務全般を担当しています。

会議・会合日誌

2005/8～2005/9

◆役員会

8月11日(木)18時から開催。各部会報告のほか、会計から4～7月の収支概況について報告があり、ほぼ順調に推移していることが確認された。また、『入会のご案内』が残部僅少となったため増刷することとし、内容の見直しチェックを広報部会に依頼した。出席11名。

9月8日(木)18時から開催。友の会専用事務室が引渡されたこと(1ページ参照)、友の会セミナーの講師について博物館側の協力が具体的に決まったことなどが報告された。『入会のご案内』は試し刷りと見積りが提示され、発注が承認された。出席11名。

◆事業部会

8月4日(木)18時から開催。7月事業の報告、8～9月までの担当者決定のほか、秋のセミナー、見学会追加について話し合い、セミナー用パソコン導入案の検討などを行った。出席21名。

9月1日(木)18時から開催。8月の事業の報告を行ったほか、9～12月までの事業の確認、担当者の決定を行った。出席19名。

◆広報部会

8月19日(金)16時から開催。『えど友』第27号の反省、第28号の内容と分担などを話し合った。また、役員会から依頼のあった『入会のご案内』の内容見直しを行い、改訂案をまとめた。出席7名。会終了後、場所を移して暑気払いの懇親会を行った。

9月28日(水)15時から開催。『えど友』第28号の内容確認のほか、第29号の新春特集企画について検討した。出席8名。

◆総務部会

8月25日(木)14時から開催。『えど友27号』などの発送作業を行ったほか、「えど友サークル」ガイドライン見直しの必要性などを話し合った。出席10名。

えど友

サークルだより

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

◆江戸三十六見附を巡る会

◇9月23日(金・祝)に第6回を開催。地下鉄東西線九段下駅に集合、コース説明後、地上へ出てすぐの蕃書取調所を説明板で見て、牛ヶ淵公園、九段会館(旧軍人会館)から千代田会館脇の記念碑、精華女子校跡、愛国婦人会長奥村五百子像跡などを経て清水門へ着いた。高麗門の扉釣金具には「万治…御石火大工」と読めるが、この御石火大工は本来大砲鋳造者で平和な世が続いたので釣金具などの製作に転じていたもの。次いで北の丸公園、旧陸軍近衛第1・2連隊跡記念碑などを経て田安門へ。ここで江戸の時刻と不定時法や方位の名称・使い方などの説明があり、お彼岸中日でにぎわう千鳥が淵戦没者墓苑、イギリス大使館前を通過、半蔵門を遠く眺め、最高裁から議事堂前庭で井伊家屋敷跡碑などを見て、さらに外桜田門、祝田橋交差点から日比谷見附と石垣を見るという盛りだくさんの見学だった。最後に休憩した茶廊や二次会では見附巡りが終わっても何らかの形でサークルを存続させようという声も出た。参加者は22名。

◆落語・講談を楽しむ会

◇8月1日(月)に第10回会合を開催。今回は「谷中周辺散策」。JR日暮里駅より本行寺、経王寺などを経て3代目三遊亭円遊の墓(啓運寺)、講釈師初代・2代松林伯円の墓(南泉寺)を訪ね、5代目古今亭志ん生の晩年の旧居跡を見学した。本授寺をまわって御殿坂近くの喫茶店で休憩。猛暑の中生き返った心地がした。後半は観音寺で4代目桂文楽、3・4代目桂三木助の墓参りをし、笠森稲荷跡の功徳林寺などを見てから、谷中・全生庵で三遊亭円朝の墓参りと円朝収集の幽霊画を見た。さらに新幡随院跡の谷中小学校、笠森お仙と鈴木春信の碑のある大円寺を見て地下鉄千代田線千駄木駅前で解散した。その後有志が居酒屋で歓談した。参加者は9名。

◇9月15日(木)に第11回会合が「日本橋人形町周辺散策」をテーマに行われた。地下鉄半蔵門線水天宮前駅より出発して水天宮に参詣、ここの由来・源平合戦が講談、落語の「源平盛衰記」につながる。次いで甘酒横丁の志乃多寿司総本店でいなり寿司を買い、旧浜町河岸跡を通って笠間稲荷、元吉原跡に建つ末広神社にお参りし、人形町交差点で旧歌舞伎町跡の説明を聞いた。そして玄冶店跡碑、寄席・末広跡、三光稲荷へ。落語「百川」「天災」の登場人物はこの辺に住んでいたという。次の椙森神社は落語「宿屋の富」の舞台、さらに大日如来遺跡を経て、十思公園で休憩し、さきほど買ったいなり寿司を食べた。その後、お玉が池跡、お玉稲荷、柳森神社をまわってJR秋葉原駅で解散した。参加者は12名。

◆藩史研究会

◇8月31日(水)第1回発表会を開催、今回は大渡真司さんが伊予宇和島藩の藩史について研究発表を行った。『現在の宇和島市は真珠やハマチの養殖が盛んで、イワシやアジの好漁場、柑橘類の宝庫。元和元年(1615)仙台藩主伊達政宗の庶長子秀宗が秀忠から10万石を与えられ入府、以来松島藩を宇和島藩と改め、伊達氏が9代260年にわたり在封した。歴代藩主のうち初代秀宗、5代村候、7代宗紀、8代宗城の4名が名君として祭神になった。現在谷中霊園に宗城、品川・東禅寺には秀宗ほか藩主、正室、側室、子女などが眠っている』というのが説明の要旨で、「宇和島騒動」などについても説明された。参加者は20名。

◇9月28日(水)第2回発表会を開催した。今回は米山彰さんが信濃高島藩諏訪家について、諏訪大社と諏訪家の概要・藩史、諏訪郡小史、高島城概要、歴代藩主・石高・所領の変遷、江戸城の詰間・上屋敷・下屋敷などの研究発表を行った。さらに土屋獻一郎さんが豊後国臼杵藩稲葉家について、臼杵藩・臼杵城史の概要、稲葉家系図、臼杵稲葉家歴代藩主の経歴、江戸城の詰間・上屋敷・下屋敷などの研究発表を行った。参加者は18名。会終了後有志により懇親会を行った。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

◇9月8日(木)に第1回の会を友の会事務室で行った。定員オーバーした人をお断りしてのスタートとなった。「八丈実記」は"近藤富蔵"が23歳で八丈島に流刑になってから42～51歳の間に書いた実録で、内容は八丈島の生活、歴史、文化、風俗その他の記録で、28巻ある。その後曲折があり、現在は36冊となっている。大野晴美さんから富蔵の人物紹介もあり、楽しい2時間を過ごした。皆さん熱心でインターネットで調べた資料のコピーを持参された方があり、大変参考になった。参加者は10名。

●新しいサークルの立ち上げを！

現在4つのサークルが独自の活動を展開しています。みなさんもサークルを立ち上げて、同じ趣味や関心を持つ人々との交流を深めてみませんか。サークルをスタートさせるための資料(ガイドライン)の請求、お問い合わせは事務局へ。

申込先　〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

ひと友プラザ

～友の会会員の投稿欄～

甲州道中「ある記」
第１回 日本橋～内藤新宿

管林義隆

東海道、中山道に比べてほとんど案内書の類の無い「甲州街道」を江戸時代にタイムスリップした気分で歩いてみた。

甲州道中は五街道の一つで、日本橋より甲州を経て信州下諏訪宿で中山道に合流する。はじめ「甲州海道」と呼んでいたが、甲州は「海なき国」であり、「この道に海道と申す事のあるべき事にもなく」という理由で、享保元年(1716)「日光海道」とともに、以後「道中」と呼ぶようになった。(甲州道中分間延絵図より)

江戸初期には日本橋を出て、飯田町から外堀、神保小路から市ヶ谷見附を経て外堀などのルートもあったが、内堀沿いに半蔵門、南回りで桜田門の外を回り半蔵門が一般的になったらしい。

私は、「江戸東京重ね地図」のプリントを手にしながら南回りのルートを選んで歩くことにした。日本橋を出てすぐ右に曲がり、一石橋（橋の南北に後藤両家があり、五斗と五斗で合わせて一石が由来）の袂（たもと）の「迷子しらせ石標」にちょっと寄り、呉服橋からJRのガードをくぐり、左折すると東京駅北口。ここから和田倉門に向かって歩き、東京銀行協会（伝奏屋敷跡）の前を通って内堀通りを南に向かう。馬場先門から皇居外苑の中の楠公像（アジア系外国人旅行者でいっぱい）前を通り抜け、桜田門（外桜田門）をくぐり、半蔵門へと向かった。途中、井伊家の屋敷跡を訪れたくなり、国会前洋式庭園（明治24年=1891、5月に設けられた日本水準原点がある）・憲政記念館へ寄り道し、三宅坂交差点から最高裁判所・国立劇場の前を通り半蔵門に到着。

内堀通りと別れを告げ、麹町大通りへと入る。現在、麹町は六丁目まであるが、江戸時代は十三丁目まであった。およそ15分歩くと三十六見附の一つ四谷見附門跡にたどり着いた。遺構の石垣が残してあり、大きな木が植わっている升形を頭に浮かべ、JR四ッ谷駅北側の小橋を渡った。すぐ左に曲がって新宿通りに出るのが普通だろうが、三栄通りを真っ直ぐ行くことにした。「新宿歴史博物館」の案内標識を見て、なお直進すると津（つ）の守（かみ）坂にぶつかり、左折して新宿通り（国道20号）に出た。

四谷三丁目の交差点、消防博物館を過ぎるとまもなく「四谷大木戸」だ。元禄年間まで馬改番屋が設けられていたが、町入用節減令が出されると免除を申請して認められ取り払った。内藤新宿側には玉川上水の水番屋が置かれていた。玉川上水は、多摩川の羽村堰（せき）で取水し、ここまで素掘で流し、ここから先は地下九尺を石樋（いしとい）や木樋で江戸市中へ通水した。

水番人1名が置かれ、水門を調節して水量を管理したほか、ゴミの除去を行い水質を維持した。「水道碑記（すいどうひのいしぶみ）」と石碑を利用して造られた「四谷大木戸跡碑」があった。

新宿区民センターの中には入らず、新宿御苑（信州高遠藩内藤家の広大な屋敷跡）の入り口に目をやった後、新宿通りの二本北側の細い道を西に向かった。少し進むと小さな公園があり、その一角に新宿区指定史跡「三遊亭円朝旧居跡」を見つけた。明治21年(1888)から28年(1895)まで住んでいたとのことである。

さらに独特の雰囲気の路を進むと右手に太宗寺が現れた。入るとすぐ右手に「銅造地蔵菩薩坐像」が鎮座している。深川の地蔵坊正元が発願した「江戸六地蔵」の3番目として造立されたもの。さらに奥で、昭和27年内藤家墓所から出土した切支丹灯篭（隠れキリシタンがひそかに礼拝した）を目にした。ここには奪衣婆像（だつえばぞう）、内藤正勝の墓と墓地出土品、三日月不動像、塩かけ地蔵など文化財が多数あるらしいが見ないでここを後にした。

末広亭の看板を見て、新宿三丁目交差点へたどり着いた。青梅街道と分かれる「新宿追分」だ。角には追分交番、道路を挟んで向かい側には追分団子。

明治通りを渋谷方面に歩き新宿四丁目の交差点、赤い鳥居の雷電稲荷神社にお参りして天竜寺へ。明治通りに面して昔ながらの門構え、ひときわ目立つ。はじめ天竜川辺にあったが、のち江戸牛込に移って火災にあい、さらにこの地に移ったとある。江戸の入り口で、玉川上水と甲州道中が接触する場所にあたっている。

天龍寺（天竜寺）の梵鐘（ぼんしょう）は、上野寛永寺、市ヶ谷八幡のものと並んで江戸三名鐘に数えられた。時を告げるのに登城の武士の便宜をはかり30分ぐらい早めについたといわれている。そのため新宿岡場所の泊り客は早く出されたので「追い出しの鐘」ともいわれた。川柳に「あの四つは天竜寺かと安い奴」。同寺には時の鐘の時刻を見る櫓時計（やぐらどけい）が現存する。【次号に続く】

天龍寺の梵鐘「追い出しの鐘」

素晴らしきかな深川祭

岡本静雄

深川祭は今年が3年に1度の大祭で8月14日に盛大に連合渡御が行われました。

「わっしょい、わっしょい」「もおーめぇー、もおーめぇ」「させ！させ！」と掛け声高らかに威勢良く駆け巡る深川祭（富岡八幡宮例大祭）は素晴らしいものです。他の祭にはない光景がたくさんあるのです。例えば「差し上げ」(担ぎ手が両手で神輿（みこし）を上に向かって差し上げること)、「揉（も）み上げ」（いきなり差し上げるのではなく、もみながら「差し上げ」ること)、「差し切り」(「差し上げ」の状態で橋を渡りきること）といろいろの技が随所で演じられます。これらの技は四つ角中央、神酒所（みきしょ）前、トラックからの水掛け場所、そしてクライマックスの富岡八幡宮前で披露されるのです。

「差し切り」は、神輿が永代橋と清洲橋を渡る際に行われます。「もおーめぇー、もおーめぇ」の掛け声で神輿を地上すれすれまで下げてから両手で差し上げることを2回程繰り返し、最後はハトを飛ばすように神輿から一斉に差し上げた手を放して一瞬上に放り出します。これが大変難しく、神輿を水平に上げることがなかなかできません。先棒の人と後棒の人の息がピタッと合わなければできません。担ぎ手の心が一つになる素晴らしい瞬間です。

指揮官としては大変な見せ所です。見事にできるとギャラリーから大きな拍手が沸き起こります。まさにオーケストラの指揮者になった気分になれるのです。

水掛祭

次に「水掛祭」の異名を持つほどの水が存分に浴びせられます。

大型トラックの荷台にシートを張り詰めて中に水をいっぱいにため、その水を20人～30人がバケツにくんで、神輿と担ぎ手に向かって一斉に掛けるのです。

水を浴びると担ぎ手はさらに元気が出る、すると水掛人はさらに勢い良く水を掛けるといった具合に双方のボルテージが上がっていきます。一時は息がつけないくらいに水を浴びるのです。

また、消防演習代わりに消火ホースから放水することもありました。消火時同様に担ぎ手目がけて放水されたため、体に直接当たり大変痛かったことを覚えております。今はホースを上空に向けて放水しますのでよくなりましたが、それでも大粒の雨の嵐です。

ギャラリーもバケツで担ぎ手めがけて存分に水掛ができるのです。友人・知人目がけて水を浴びせるのですがこれがなかなかうまくできず、ハプニングの連続となるのです。バケツが一緒に飛んだり、目がけたところと違ってギャラリーに掛かったりするわけです。これを逆手にとって、わざと神輿以外に掛ける人も多いのです。

こんな時とばかりに水を掛けられたおまわりさんも、お祭に免じて笑ってこの洗礼を水に流してくれます。

ある時逃げ回るおまわりさんを追いかけて水を掛けていた光景を見ました。

こうして担ぎ手とギャラリーとが一体となって楽しめるのも深川祭の素晴らしさです。

神輿は担ぐもの

四国の阿波踊りが「踊るアホウに見るアホウ、同じアホウなら、踊らなあソンソン」と言われているように祭も自分が担がなければ本当の祭は理解でません。いろいろの祭の神輿を担いだり見に行きましたが、深川の祭がやっぱり最高です。

神田・浅草などから応援に来る若者は皆「楽しい!!」と言います。「自分の所と深川祭とどちらが楽しいか」と尋ねると「やぼなこと聞かないで」としかられますが、やっぱり深川が一番のようです。

一番心がときめく時

朝6時過ぎまさに真っ赤な太陽が昇り始めたその時、わが町内の神輿が神酒所をスタートするのです。まぶしく輝く朝日と興奮に担ぎ手の身体が徐々に赤みを帯び、その黒いシルエットが長く西方向に映し出され、やがて朝もやがかかったようになります。その幻想的な光景こそ私が一番すばらしいと思うものの一つなのです。

次に4つ角に差し掛かるわが神輿に他町の神輿が四方から向かってくる様も私の心を踊らせ、胸のときめきは最高潮に達します。「わっしょい、わっしょい」の掛け声が段々と大きくなり、ステレオ音響のように聞こえて来るのです。この迫力は、スタートしたばかりの元気な神輿であることに加え、太陽の鮮やかな光に照らされて神輿がなお一層映え勇ましくさえ見えます。

しかし、最近は天候が思わしくないのと高層ビルによりこのような光景が見られなくなったのは寂しい限りです。

永代橋は差しきる

400～500mある永代橋・清洲橋を差し切るのは大変なことで、仕切る睦（祭の運行を仕切る青年部員のようなもの）が総出で次から次と交代しながら神輿を支え続け絶対に神輿を肩に下ろさせずに渡り切るのです。さながら戦場のような有様です。

ある時、町会役員が永代橋の半ば過ぎで、笛を吹いたため、神輿が下ろされてしまい、わびしい思いを味わいました。以来当町会は笛を誰にも持たせないことにしたのです。

なぜ、差し切るかは、古くさかのぼれば文化4年(1807)永代橋が崩落し、2000人とも3000人とも言われる死傷者を出し、この大惨事の霊を弔うことを意味しているのです。

ある一時期、永代橋を差し切らないと佐賀町でのトラックからの凄い水掛けの洗礼が受けられず惨めな思いを味わいました。

イダテン神輿

神輿の進行が速いのも深川祭の特徴です。直線で8.5kmを回らなければならないのです。

友好関係にある神田、浅草からの応援者が良く私に「ちょっと休んだり、トイレにいったりしたら、はるか向こうまで神輿は行ってしまうから、追いつくのに大変だ」といっていました。

反対に私達も神田、浅草等に応援に行きますが、遅れが出るとその町の指揮官は「深川担ぎで行こう」といって遅れを取り戻しますが、これも面白いことです。

ストレス解消に絶好

大声を張り上げることによりたまっているストレスが解消されます。終了後3日間位は声が出ません。心身がクタクタになり若い頃は私の絶好のストレス解消法でした。最近若者の変な事件が多いのもストレスがたまっているのかもしれません。深川には変な事件が起きないのは祭でストレスを解消しているからだと常に思っています。若者に人気があるのはこのストレス解消が大きいと思います。

その昔、一般車両は通行止めにしても、都電・都バスは公共のものなので所定のルートを時間通りに通すが、それが邪魔なので神輿ごとぶつかりにいったりして嫌がらせをしたものです。これも祭だから許され、担ぎ手からしたらストレスの解消となっていたのです。

半纏の素晴らしい威力

警備が今ほど厳しくなかった頃は、半纏（はんてん）を着ていなくても神輿のそばにいることができたのですが、平成に入った頃から警備が厳しくなり、半纏を着ていないギャラリーは神輿から離されて縄の枠の外に出されてしまいます。一方、半纏を羽織っていれば神輿のそばにいられるだけでなく、各給水所の冷えたお茶の接待を受けられます。私の友人に半纏を着せたら「半纏がこんなに威力あるとは思わなかった」とびっくりしていました。

このほかにも深川祭には素晴らしい見どころがたまだまだありますが、今回はこれまでといたします。もしも3年後の大祭に参加したい人はお申し出下さい。

あなたも「部会」に参加してみませんか！

現在、広報部会と総務部会では部会員を募集中です。奮ってご参加ください。

広報部会の活動は会報『えど友』と『えど友 Web』の作成で、具体的には「友の会セミナー」の要約の作成、「内覧会」「見学会」の体験レポート作成、スナップ写真の撮影・その他です。

部会は毎月1回（おおよそ第三週の水曜日・午後3時から5時）、江戸博事務棟の「友の会事務室」で開催されています。部員は現在11人（女性4人、男性7人）です。みなさん素人ですから、入部してみませんか！ されても決して気後れすることはありません。一度部会の様子を見学され、入部をお考えください。

総務部会は友の会総会の運営、催事の受付や、会報発送、えど友サークルの活動支援などを担当しています。

主に会報発送に合わせ、気心の知れた仲間（現在は総勢16人）が集まって作業をしています。いま部会では新しい仲間を募集しています。一緒に集まって簡単な作業や交流をしてみませんか。

＊いずれもご連絡、お申込は事務局へ。

落語・講談・街めぐり

川辺愛子

私は、えど友サークル「落語・講談を楽しむ会」に入っていて、お陰で落語、講談はもとより街めぐりまで楽しませていただいています。特に落語や講談にちなんだところを歩く街めぐりは、食べる楽しみまで加わってとても気に入っています。

先日（9月15日）の11回目の会は「日本橋人形町周辺散策」でした。江戸時代には歌舞伎や人形の芝居小屋があり、人形師が多く住んでいたという由緒ある町です。

集合場所は地下鉄半蔵門線の水天宮前駅前、毎回世話人の鈴木秀明さんがレジュメを作成してくれます。各見学先の説明、そこが舞台となった落語の紹介、参考文献のコピーなど盛り沢山です。地図には見学地の行程番号が記入されていて、分かりやすくなっています。江戸切絵図のコピーもついているので、現代の地図と見比べることもできます。

水天宮のお参りを終え、人形町通りから甘酒横丁を明治座方向へ歩きました。通りには江戸時代からの老舗など、たくさんの店が並びにぎわっています。おいしそうな食べ物の店もあり、私たち一行は「甘味処・つくし」の“人形町風鈴（プリン）”、「鳥専門店・鳥忠」の“玉子焼”、「志乃多寿司総本舗」の“一口五目いなり”を買いました。

ちょっと苦めのカラメルソースの“プリン”、出し汁がしたたる甘口の“玉子焼”、テレビのある料理番組で紹介されたことがあるという“一口五目いなり”を、休憩をとった十思公園で分け合って食べました。青空の下、みんなでおしゃべりしながら食べると、一段とおいしく感じられました。この十思公園は江戸時代牢屋敷があったところで、安政の大獄に座し刑死した幕末の志士・吉田松陰の歌碑があります。

鈴木さんの案内で各地を見て歩き、当初の予定になかった大丸デパートの跡地（東京駅へ移る前の店があった所）、マンションの通路の奥にある出世稲荷、秋葉原駅近くにある柳森神社も見学しました。名所や旧跡をめぐり、おいしい物も食べることができて、とても楽しい一日でした。

このサークルは昨年11月に発足しましたので、早くも1年になります。その中で、私が一番印象に残っているのは4月20日の6回目の会です。

この日は浅草水上バス発着所に集合し、水上バスで浜離宮まで行きました。庭園を散策し、中の島茶屋で抹茶と和菓子をいただきました。それからまた水上バスに乗り両国へ。昼食は「桔梗家」で柳川丼を食べました。そして「お江戸両国亭」で講談鑑賞です。この日、私は初めて水上バスに乗り、初めて浜離宮に行き、初めてどじょうを食べ、初めて生の講談を聴いたのです。初めての経験ずくしで、心に残る一日となりました。

このように、いろいろな所へ行って、見て、聴いて、その上食べてという楽しみが増えました。落語や講談を聴いて、笑ったり、泣いたり、感心したりしていると、心をリフレッシュできる気がします。人との出会いが広がり月に一度の会合が待ち遠しくさえ感じます。これからも素敵な出会いがたくさんあるといいなと思っています。

【作者・原えつおさんのお便りから】
その7は外の順番で、江島杉山神社です。江島は江島生島の江島ではなく、江ノ島なのですね。ここはちょっとした洞くつがあったりして面白いですよ。杉山真伝流は一度消滅した杉山流を現代に復活させたものです。

「美しき日本 大正昭和の旅」展をみて

桐井聰男

旅行が自由にでき、どこへでも訪れることができるようになったのはごく最近のことである。もちろん、太古から現代まで人は旅をして生きてきた。イザナギ・イザナミの二神も旅の結果、この日本に到着した。そのDNAからみて日本人はすべて旅人なのである。その旅を分析してみると、神武天皇における軍事の、在原業平は官歴の、柿本人麻呂や松尾芭蕉の旅は文学というジャンルが職業化したものであろう。不思議なことに日本人の心である万葉集の分類には、雑歌・相聞・挽歌・比喩歌・東歌・往来歌・古今相聞・有由縁雑歌の分類で、旅の歌は往来歌の中にあるだけである。それは旅の歌が少ないというのではなく、あらゆるものに旅が空気のように作用しているのである。

旅は多くの人が思っているように自分の住む土地を離れ、他所へ赴くことである。しかし、この「旅」の語源の説明には

1）トビ（飛）からの分化
2）度（タビ）　遍（度）幾回も土地を離れるとの意味
3）他火(他日)　他人の火(カマド)をいただく、食べ物をいただく
4）賜る　食べ物を賜る（柳田国男）

などがあるが、4）の賜るという説が現在通説のようである。だが、これは食べ物以外にも人情や光景を賜るものと解釈すべきであろう。

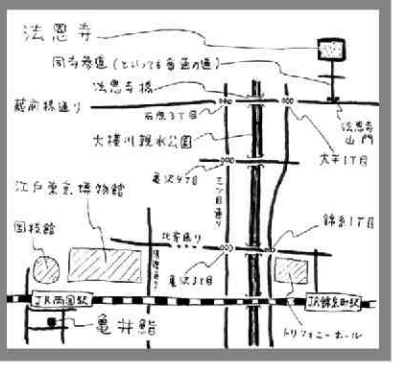
このように、今回の展示を拝見すると、一歩一歩目的地を目指す女性群(清里を旅する女性たち)：宮島の雪景（巴水）あるいは九州・亀の井のバス、これはガイドの放送も楽しませてくれている、そして数多くの絵葉書、そこにはゆったりとしたスローな旅自体を楽しむうらやましい生活がみてとれる。

私たちは考えられない程の「タビ」をしている。果たしてそれは旅なのであろうか。ただ、移動しているだけのような気がしてくる。これは「美しき日本 大正昭和の旅」展をみての反省であるとともに、ゆったりとした生活を忘れてしまったことへの後悔でもある。

ちょっと寄ってみませんか？

江戸博界隈⑥

［法恩寺・亀井鮨］



法恩寺

「法恩寺の左側は横川に沿った出村町であるが、このあたりは町といっても藁ぶき屋根の民家が多く、本所が下総国葛飾郡であったころのおもかげを色濃くとどめている。

その一角へ、長谷川平蔵は歩み入った」（池波正太郎『鬼平犯科帳１』「本所・桜屋敷」文春文庫）。

長谷川平蔵が若いころ剣を学んだ本所・桜屋敷（高杉銀平道場）が法恩寺の近くにあり、このあたりは池波の小説にはしばしば登場するところです。

さて法恩寺ですが、ここは長禄２年(1458)太田道灌が江戸城を築くにあたって、丑寅(北東)の方角、平川村に祈願所を建立、京都から本住院の日住上人を迎えて開山した寺です。大永４年(1524)、道灌の孫の資高が寺門の規模を拡大し、父資康の年忌の折、父の法号にちなんで法恩寺と改称しました。

江戸城が徳川家康の居城となり、慶長10年(1605)に本丸拡張の際、法恩寺は神田柳原に移され、再び慶安２年(1649)には谷中清水町へ。さらに元禄８年(1695)、やはり幕府の命により現在の地・柳島出村（墨田区太平町1-26）に移転しました。当時は塔頭20、子院11を数えるほど寺運は盛んだったようで、『江戸名所図会』を見ると、寺域の広大さがうかがわれます。幾度かの震災や火災にあい、現在の堂宇は昭和29年(1954)に建てられたものです。寺域も縮小され、今は子院も４寺しかありませんが、山門をくぐって長い参道を行くと、その両側に子院が建つ昔ながらの古い形を保っています。

▲左から歴代、開山の墓、右が道灌の墓

参道を抜けて再び門を入ると、まず本堂の正面右側に大きな板碑と、その向かいに鐘楼三重塔があります。２つとも比較的新しく、板碑は太田道灌開都500年を記念して昭和31年(1956)に立てられたもの。また、三重塔は、１つの玉石に１字ずつ経文を書き納めたという経石塔で、昭和７年(1932)の建立。

古いものとしては、道灌の頃から本住院(法恩寺の前身)の側にあったという平川清水稲荷が、本堂の左側奥にあり、その碑柱が今に伝わっています。また、この稲荷の横に小さな碑が３つ。一番左は岡場所の遊女たちの墓碑だろうか。茶屋が建てたもので、文政や天保の頃(1818～1843)の女性の戒名が100人ほど小さな文字でぎっしり書かれています。

本堂の左手が仕切られて墓地になっており、入り口正面奥に黒くすすけた高さ１m半ほどの五輪塔があります。これが道灌の墓（供養墓）です。すすけているのは、東京大空襲でこの寺が焼けたときの名残とか。

明治の初めに柳島出村は、太田道灌の「太」とこの寺の山号平河山の「平」をとって、太平町と地名変更されました。横川にかかっていた近くの法恩寺橋も、川が埋め立てられ、橋下が大横川親水公園になっています。帰りにちょっと散策するのもいい。

江戸博より徒歩約30分。またはJR錦糸町駅から徒歩約10分。電話03-3622-8267

亀井鮨

明治20年創業。４代目の主人は「すし屋は高い」「老舗は頑固」のイメージには挑戦的です。えびは、注文を受けてからゆでるなど味にはこだわりますが、「こんなのないかなあ」という客のつぶやきには、できる限り応えます。それらを後でよく吟味し、裏メニューで出すうちに人気の出たものが、この店の「オリジナルずし」です。

たとえば、アボカドとサーモンとほっき貝の裏巻き(１本500円)や、山ごぼうときゅうりとかんぴょうを一つにしたさっぱり茶巻き(400円)など。また、まぐろの大とろを湯ぶりにして大根おろしに特製のみそをのせたにぎりずし(１個500円)や、ゆずの風味を利かしたあなご白煮仕立てのにぎりずし(１個200円)。注文でにぎるお好みにぎりは１個100～500円。

一品料理もあり、たいのかぶと焼き(500円)、ジャンボえび塩焼き(350円)、魚介の串焼き(１本250円)、サーモンサラダ(500円)など、酒のつまみに向きます。酒は清酒１合(180ml)350円、吟醸（300ml)900円。飲むだけですしを食べずに帰る客も主人は歓迎します。テーブル席も多く、落ち着いた雰囲気で飲めるのがいい。

ランチはねぎとろ丼850円、にぎりずし1000円から。

営業　平日11時半～13時半、17時～22時半、土曜11時半～15時、16時半～21時半　定休日　日曜、祭日
江戸博から徒歩７分。墨田区両国2-18-13
電話03-3631-7483

【取材】文：広報部会・大野晴美、写真・地図：同・松原良
【参考】平河山法恩寺縁起

催事案内

友の会セミナー

第34回
「シーボルトとモースの日本コレクション」
―19世紀における日欧米異文化交流―その1

講師　小林淳一さん

◆江戸時代の鎖国下、わが国とヨーロッパの唯一の窓口であった長崎出島に、文政6年(1823)、オランダ商館付医官シーボルトが来日しました。医学をはじめ西洋の最新の科学技術をもたらす一方、日本の総合的研究のため膨大な日本文物をオランダに持ち帰りました。また、視覚的な記録を残すべく、長崎在住の町絵師・川原慶賀に大量の絵を描かせました。ライデン、ミュンヘン、ベルリン、ウィーン、サンクトペテルブルクなど、各都市の博物館に現在も保存されているシーボルト・コレクションに着目しつつ、シーボルトの歴史的業績を紹介していただきます。

○講師略歴：こばやし・じゅんいち
江戸東京博物館 事業企画課長(学芸員)。著書に『海を渡った生き人形―ペリー以前以後の日米交流―』(朝日選書)、共著に『黄昏のトクガワ・ジャパン―シーボルト父子の見た日本―』(NHKブックス)ほか。

・開催日：11月26日(土) 10:00～11:30
・申込締切：11月15日(火)必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】 米山彰(事業部会)

第35回
「よみがえる巣鴨の町並み
―皇女和宮のおくりもの―」

講師　高尾善希さん

◆みなさんはテレビやテーマパークなどでよく江戸時代の江戸町方の様子をご覧になることと思います。米屋・呉服屋・料理屋・魚屋……、にぎやかで活気あふれた町並み。しかし意外なことにその景観はほとんどがナゾです。最近発見した幕府公文書の中の江戸御府内の場末巣鴨の町方絵図をみると巣鴨の町方約240軒の景観を正確に再現することができます。この絵図をめぐって「おばあちゃんの原宿」豊島区巣鴨でシンポジウムもひらかれました。この絵図が語る江戸町方の様子、江戸時代の巣鴨と現在の巣鴨との関係、そしてこれからの巣鴨はどこへゆこうとしているのかについて話していただきます。

○講師略歴：たかお・よしき
東京家政学院大学人文学部非常勤講師をへて、現在、立正大学文学部非常勤講師・東京都公文書館非常勤職員。共著に『番付で読む江戸時代』

・開催日：12月15日(木) 14:00～15:30
・申込締切：12月6日(火)必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】 山口千恵子(事業部会)

特別内覧会

大河ドラマ「功名が辻」
特別展「山内一豊とその妻」

◆平成18年のＮＨＫ大河ドラマ「功名が辻　山内一豊の妻」と連動して、卓越した時代感覚と器量で戦国の猛者たちと渡り合い、土佐一国を治めた一豊と妻・千代を、山内家に伝わる資料からその時代背景とともに紹介する展覧会です。

・開催日、会場：未定(通常内覧会は一般公開<12/23・金・祝>の前日に行われますが、今回は年末に近いため年明けになる可能性もあり、10月19日現在未定です。別途ご案内する予定です)
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円、同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】 米山彰(事業部会)

見学会

「小江戸川越　蔵造りの街探訪」

◆小江戸の代表的な街、川越を探訪します。有名な蔵造りの建物が建ち並ぶ一番街通りや大正レトロを感じさせる大正浪漫通り、なつかしい菓子屋横丁など見どころいっぱいの街です。主な予定コースは本川越駅―大正浪漫夢通り― 一番街通り―時の鐘―蔵造り資料館―まつり会館―菓子屋横丁―川越城本丸―喜多院―本川越駅です。

・開催日：12月3日(土) 12:45集合
・集合場所：西武新宿線・本川越駅前
・申込締切：11月18日(金)必着
・定員：80名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】 藤村武雄(事業部会)

古文書講座

第３期を１月から開講、申込受付中

古文書講座の今年度第３期を平成 18 年１月から開講します。第２期と同様、「入門編」「初級編(1)」「初級編(2)」の３講座です。ぜひご参加ください。

すでに第２期を受講されている方については、特に不参加の申し出のない限り、自動継続となりますので、お申込の必要はありませんが、別の講座を希望される場合には、改めてお申込が必要です。

◆第３期の日程など

＊入門編　１月 11 日(水)、２月８日(水)、３月１日(水)

＊初級編(1) １月 18 日(水)、２月 15 日(水)、３月 15 日(水)

＊初級編(2) １月 21 日(土)、２月 18 日(土)、３月 18 日(土)

・開催時間：すべて 14:00 ～ 16:00

・定員：各 80 名

・会場：江戸博１階会議室または学習室１・２のどちらか（当日お確かめください）

・講師：野尻泰弘さん（品川歴史館）、小宮山敏和さん（学習院大学大学院史学専攻）、小松賢司さん（同）が交互に担当

・参加費：１講座 1500 円（初回当日払い・各講座とも）

・新規申込締切：各講座とも 12 月 24 日(土)必着

◆第２期・今後の日程（すべて申込締切済）

＊入門編　第２回　11 月２日(水)　第３回　12 月７日(水)

＊初級編(1) 第２回　11 月 23 日(水)　第３回　12 月 21 日(水)

＊初級編(2) 第２回　11 月 19 日(土)　第３回　12 月 17 日(土)

【企画担当責任者】　谷岡文彦（事業部会）

お申込方法

◆普通はがきに①催事名開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく水曜日か金曜日にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●企画展「生誕 120 年 川端龍子」展

会　期　2005 年 10 月 29 日(土)～ 12 月 11 日(日)

休館日：毎週月曜日

図　録　定価、会員割引 ともに未定

会　員：一般 500 円、65 歳以上 250 円、大・専門生 400 円

同伴者：一般 800 円、65 歳以上 400 円、大・専門生 640 円

次回予告

●大河ドラマ『功名が辻』特別展「山内一豊とその妻」

会　期　2005 年 12 月 23 日(金・祝)～ 2006 年２月５日(日)

休館日：毎週月曜日と年末年始〔12 月 28 日(水) ～１月１日(日・祝)〕
ただし、１月２日(月)・９日(月・祝)・16 日(月)は開館、１月 10 日(火)は休館

＊来年の年始は２日から開館しますが、１月２日(月)・３日(火)は午前 11 時からの開館です。１月４日(水)から通常どおり午前９時 30 分開館となります。

第2企画展ご案内

好評開催中！

●「日本橋・銀座・汐留 ～メインストリートの歴史～」

●「両国と大相撲」

開催期間　2005 年 10 月 21 日(金) ～ 12 月 18 日(日)

会　　場　５階常設展示室内　第２企画展示室

次回予告

●「葛飾北斎―富嶽三十六景展」

●「福をよぶお正月展」

開催期間　2006 年１月２日(月) ～１月 22 日(日)

会　　場　５階常設展示室内　第２企画展示室

江戸東京博物館友の会　会報＜えど友＞第 28 号
平成 17 年 11 月１日発行
奇数月刊。次号は平成 18 年１月１日発行予定

編集・制作：友の会広報部会
〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910
発行人兼編集長：松原　良（副会長）　副編集長：菅沼和男
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、小柳英二郎、大野晴美、斎藤美香子、稲垣武志、岡田守弘、高澤美恵子、岡本静雄